

表現意図をもち、音楽表現を深めようとする力の育成

—高等学校芸術科「音楽Ⅰ」表現と鑑賞の相互関連を図った学習の提案—

山下真由美

高等学校新学習指導要領の実施に向け、新教育課程での芸術科「音楽Ⅰ」の指導と評価について理解を深め、授業改善を図る必要があると考えた。そこで、新しい評価の観点を基にした年間指導計画を作成し、歌唱と鑑賞の相互関連を図った構成の題材を提案する。そして、音楽的な感受を支えに展開する学習が、生徒の主体性を促し、創造的な音楽活動へとつながることを授業実践により検証した。

〈キーワード〉 **新学習指導要領、音楽的な感受、言語活動、思考・判断・表現、年間計画、授業改善**

I 主題設定の理由

音楽的な感受を支えとした主体的・創造的な音楽活動のあるべき姿とは、どのようなものか。折しも、高等学校では、新学習指導要領が平成25年度入学生より年次進行で実施となる。平成20年1月17日、中央教育審議会答申において、音楽、芸術（音楽）の学習指導要領改訂における改善の基本方針として示されたのは、「音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること」「音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむこと」などを重視することである。また、今回の改訂で、芸術科「音楽Ⅰ」（以下、音楽Ⅰ）の目標に、新しく「生涯にわたり」の文言が加えられた。ほとんどの生徒にとって、音楽Ⅰの学習は、学校で音楽教育を受ける最後の場となることが多い。そのため、この文言の加わりが意味するところは、とても深いと考えられる。改めて趣旨を理解し、中学校音楽科を基礎に、今、音楽Ⅰの授業に求められているものについて再考し、授業改善を図る必要があると考えた。その基となる「音楽を形づくっている要素の知覚・感受に関すること」、「音楽科の特性から言語活動を捉えること」、「学習指導と評価の関係の理解を深めること」の三つの課題について整理しながら、音楽科における思考・判断・表現に係る力を育成する授業の在り方を探る。それこそが、音楽的な感受を支えとした主体的・創造的な音楽活動を着実に進めていくことであり、生涯にわたって音楽に親しみ、自らの生活を明るく豊かなものにするための基となる力の育成へとつながっていくのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究の目的

音楽Ⅰにおける、「指導と評価の年間計画作成」および「表現と鑑賞の相互関連を図った題材」を提案する。その題材によって新学習指導要領の趣旨を具現化し、授業実践により検証することで、授業改善を図る一助となることを目的とする。また、音楽的な感受を基にして思考・判断・表現する過程を大切に学習が、生涯にわたる音楽とのかかわりの基点となっていくのではないかということについて探る。

III 研究の方法

- 1 意識および実態調査から見える課題
- 2 音楽を形づくっている要素の知覚・感受を基に構築した「指導と評価の年間計画」の作成
- 3 表現と鑑賞を関連付けた学習の授業実践と考察

IV 研究の内容

1 意識および実態調査から見える課題

(1) 研究協力校（福井市内の県立高校2校 1年生286名）音楽I選択者の意識および実態調査

生徒たちは、曲を演奏したり、鑑賞したりするとき、どのくらい深く音楽と向き合っているのだろうか。実態把握のため、「音楽の学習についての意識」「音楽の学習内容についての意識（中学校での学習内容も含む）」についてアンケートを実施した（平成24年4月）。

「音楽の学習」では、生徒の8割近くが、心豊かな生活の一役を担っていると感じている一方で、普段及び将来の生活や社会に役立つと感じている生徒は、3割を下回る結果であった（図1）。しかし、『あなたにとっての音楽とは何か』と問うと、生徒たちのほとんどが、「生活の一部」「なくてはならないもの」「心を安定させるもの」などと答える。これは、アンケートで『どんなときに、歌ったり、楽器を演奏したり、音楽を聴いたりするのか』について、「気分がいいとき」「リラックスしたいとき」などの記述が、多数を占めることから分かる。では、なぜ普段の生活や将来の生活及び社会に出て役立つと感じないのだろうか。

「普段の生活と音楽とのかかわり」では、特に『歌を歌うことがある』『音楽を聴くことがある』の割合が高く、9割を超えた（図2）。しかし、その内の4割から5割近くが授業で学んだことを生活の中での音楽活動に生かそうとしていない（表1）。授業で扱う音楽と好みの音楽とが噛み合わず、それらを切り離して捉え、その本質的な部分でのつながりを見出そうとしていないからではないだろうか。ここに、普段の生活や将来の生活と音楽の授業とのかかわりが、希薄となっている一因があるように感じる。

生徒たちの最も興味のある音楽の分野は、7割強を占めたJ-POPに続いて、クラシック、K-POPと続く結果となった。しかし、興味のある分野の中で、好きな曲や作曲家、歌手など、具体的な記述を求めたところ、2割もの生徒が、「特になし」と回答した。生活と音楽のかかわりはあっても、歌詞の内容や旋律、リズムなどを中心に音楽を聴いている（表2）ことから分かるように、自身の置かれている状況や環境とそれらを重ね合わせ、好む音楽が移ろっているようだ。つまり、一過性の気分で終わってしまっているのではないか。これには、従来のオーディオプレーヤーではなく、簡単に手に入って気軽に持ち歩ける携帯音楽プレーヤーやパソコン等で音楽を楽しむといった、生徒たちを取り巻く音楽環境の変化も少なからず影響しているのかもしれない。

私たちは、様々な経験から音楽的な嗜好を確立していく。それが確立されつつある重要な時期にいる生

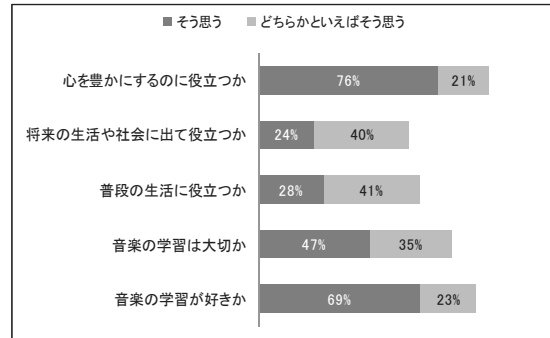


図1 音楽の学習について

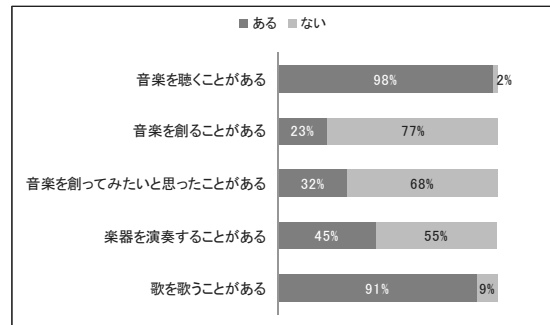


図2 普段の生活と音楽とのかかわりについて

表1 授業で学んだことを生かそうとしているか

	歌唱	器楽	創作	鑑賞
そうしている	18%	24%	24%	12%
どちらかといえばそうしている	45%	51%	51%	39%
どちらかといえばそうしていない	0%	0%	0%	0%
そうしていない	37%	25%	25%	49%

表2 何に共感しているか

共感している点	割合
歌詞の内容	30%
旋律やリズム	30%
強弱や速度	8%
音色	15%
和音や和声	5%
曲の構成	6%
音と旋律の組合せ方	4%
音楽の背景	1%
その他	0%
無回答	1%

徒たちにとって、授業で多様な音楽に触れ、追求していく学習は、音楽経験の幅を広げることにつながる。改めて、授業改善の必要性を痛感した。

(2) 思春期の発達と芸術科音楽の授業について

中学校音楽科を基礎に、芸術科音楽で行うべき授業とはどのようなものか。思春期の発達とのかかわりから、整理する。

『思春期の発達の特性と音楽教育』序章の中で藤沢（2003）は、思春期における音楽的な発達について、「感情に大きくかかわる教育としての音楽では、どのような音楽学習を思春期のどの時期におこなうことが、精神的成長の上で必要かつ効果的かについても考えを広げることも重要なことであろう」と問題を提起している。そして、思春期の音楽教育を考えるための視点として①自己表現、②グループ活動、③理論と情緒のバランス、④主体的な学習活動、⑤自尊心への対応を挙げている。この視点で、今までの授業を振り返ってみる。それぞれの視点において、配慮された授業が展開されてきているが、中でも③、④について、今後の授業改善への鍵があると感じる。まず、③では、情緒の不安定さへの対応に苦慮し、生徒たちの知識欲を満足させるような学習内容をあまり提示することができていなかったのではないかと。また、④では、音楽表現をするために必要な技能を身に付けさせることに終始するあまり、生徒たちが主体的な音楽活動に対して注意を向けられないことが多かったのではないかと。

生徒たち自らが、主体的に音楽活動に取り組もうとする時は、音楽と深く向き合い、自分にとっての価値を見出している。それは、「音楽から感じたことを、こんな風に演奏したい」という思いや、「感じたことをこんな風に演奏したいから、技能を向上させたい」といった思いなどに支えられている。知的発達がめざましく、音楽的な嗜好が確立されつつある時期だからこそ、多様な音楽に触れる機会を大切に、音楽の文化的・歴史的背景や音楽のしくみなどの学習をしっかりと定着させるべきである。その積み重ねによって、生徒たちの音楽的な視野を広げ、自分なりの価値観をもつことへとつながっていくのではないかと。藤沢（2003）が、「音楽の仕組みや楽器のこと、歴史や背景など、理論的に納得できることを学習内容に位置付けることは、音楽学習を定着させる大きな鍵である」と述べているように、学校での様々な音楽経験が、将来、自らの意思で音楽の価値を見出し、取捨選択できる力となる。

思春期の音楽的な発達を捉えた指導の工夫や学習内容の精選を行い、芸術科音楽の授業が、生徒たちの自発的な学びへとつながっていくよう、改善を行っていかねばならない。それこそが、生涯にわたり音楽に親しんでいこうとする態度そのものに深く関わっている。

2 音楽を形づくっている要素の知覚・感受を基に構築した「指導と評価の年間計画」の作成

(1) 指導と評価の年間計画の作成にあたって

新学習指導要領が、平成25年度入学生より、年次進行で実施となる。そのため、その趣旨を踏まえた新しい年間計画が必要となってくる。そこで、現行の年間指導計画や平成24年度使用中学校教科書、平成25年度使用高等学校教科書を参考に、従来の年間指導計画に題材毎の評価規準、評価方法を加えた「指導と評価の年間計画」を作成した。その抜粋を掲載する（表3）。

各題材の詳細な指導計画や学習活動の展開とそれに対する評価規準、評価方法を作成し、それらを一つにまとめたものが指導と評価の年間計画である。ここでは、年間計画の作成についてのみ触れ、第3章で表現と鑑賞を関連付けた題材について、その詳細な学習指導とその評価のイメージや学習活動の展開などについて述べる。作成にあたり、音楽Ⅰの目標や指導内容、小・中学校における〔共通事項〕に相当する内容を冒頭に載せた。これは、それらを常に意識しながら指導を進めていく必要があるからである。また、学習指導と評価は表裏一体の関係であることから、音楽Ⅰの特性に応じて示された評価の観点およびその趣旨を載せ、知覚・感受したことを基に評価していく方法を具体的に記述した。

作成上、次の三点に配慮した。第一に、音楽Ⅰにおける学習指導要領改善の具体的事項である「音楽に

3 表現と鑑賞を関連付けた学習の授業実践と考察

(1) 「音楽を形づくっている要素の知覚・感受」を要として、歌唱と鑑賞を関連付けて構成した題材の提案

〈題材名：アンサンブルの魅力ー楽譜の先にあるものを探り、表現を工夫しようー〉 Cタイプによる題材構成
 混声四部合唱「木を植える」(谷川俊太郎作詞/木下牧子作曲)、「四重奏曲ニ短調 TMV43:d1」《ターフェルムジーク第2巻》から(テレマン作曲)を教材とし、歌唱と鑑賞を関連付けた題材構成による学習指導を行う。学習指導要領の内容は、「A表現」(1)歌唱の事項ア、ウ、エおよび「B鑑賞」の事項イ、ウを扱う。題材全体を貫いて扱う「音楽を形づくっている要素」は、リズム、旋律、テクスチュア、強弱である。

表現と鑑賞を関連付けた題材設定の要は、題材の学習全体を貫いて共通に扱う「音楽を形づくっている要素」を明らかにすることである。

表5の①は、本題材の指導内容を図示したものであり、表現→鑑賞→表現の流れで、知覚・感受を深めながら展開する。リズム、旋律、テクスチュア、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じることが、歌唱と鑑賞の両方の支えとなり、音楽表現を創意工夫しながら追求したり、創造的に味わって聴いたりする学習を充実させていく。そして、「作曲者による表現の特徴などを理解し、旋律の表れ方と声部の役割などについて聴き深めたことを演奏に生かして、めざす音楽表現をイメージし、工夫を重ねながら、混声四部合唱の響きを追求する」ことをめざす。よって、ここでは、混声四部合唱を行うための参考として鑑賞するといった、従属的な活動に留まらない。鑑賞の質的な充実とともに、音楽表現を深め、追求するねらいがあり、ここに領域を関連付ける意義があると考えられる。

表5の②は、表現と鑑賞を関連付けた学習と新しい評価の観点との関係を示している。歌唱と鑑賞を相互に関連付けた本題材においては、

すべての観点について評価基準を設定し、その学習状況を評価することとなる。この各観点の記述は、表3の年間計画作成で、簡略化のために省いた具体的な教材名を入れた記述となっている。

指導計画の立案・作成にあたっては、①と②を常に対処させて進めた。そして、題材全体を貫いて共通に扱う音楽を形づくっている要素の知覚・感受に関する学習評価を「音楽表現の創意工夫」と「鑑賞の能力」に共通して位置づけた。この「音楽表現の創意工夫」と「鑑賞の能力」が、思考・判断・表現に係る

表5

① 表現と鑑賞の相互関連を図った題材

題材名 アンサンブルの魅力ー楽譜の先にあるものを探り、表現しようー	
題材の目標 ・曲想と歌詞の内容や楽曲の背景とかかわりを感じ取り、表現したい音楽のイメージを膨らませ、表現意図をもって歌う。 ・作曲者による表現の特徴などを理解し、旋律の表れ方と声部の役割などについて聴き深めたことを演奏に生かして、めざす音楽表現をイメージし、工夫を重ねながら、混声四部合唱の響きを追求する。	
教材名 歌唱：「木を植える」(『いのちの木を植える』混声合唱とピアノのためのから) 谷川俊太郎作詞/木下牧子作曲 鑑賞：「四重奏曲ニ短調TMV43:d1」(『ターフェルムジーク第2巻』から) テレマン作曲	
「A表現」(1)歌唱	
ア 曲想、歌詞の内容、楽曲の背景	イ 音楽を形づくっている要素の知覚・感受
ウ 様々な表現形態による歌唱の特徴	ウ 文化的・歴史的背景
エ 音楽を形づくっている要素の知覚・感受	
指導事項 「A表現」エ、「B鑑賞」イ 〔題材全体を貫いて共通に扱う音楽を形づくっている要素〕 リズム、旋律、テクスチュア、強弱	



② 学習指導とその評価のイメージ

「A表現」領域の学習		「B鑑賞」領域の学習	
音楽を形づくっている要素の学習を支えとして、音楽表現を工夫し、必要な技能を身に付け、思いや意図をもって、歌唱で表す		音楽を形づくっている要素の学習を支えとして、音楽を解釈し、価値などを考え、判断してよさや美しさなどを味わって聴く	
観点別学習状況の評価の観点			
音楽表現の技能 ←		音楽表現の創意工夫	
→		鑑賞の能力	
①「木を植える」の曲想を歌詞の内容や楽曲の背景とかかわらせて感じ取り、イメージをもって混声四部合唱の特徴を生かした音楽表現のために必要な発声、言葉の発音、姿勢や身体の使い方、読譜の仕方などを身に付け、創造的に表している。	①「木を植える」のリズム、旋律、テクスチュア、強弱を聴き取り、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受している。 ②知覚・感受しながら、曲想を歌詞の内容や楽曲の背景とかかわらせて感じ取り、混声四部合唱の特徴を生かした音楽表現を工夫し、どのように合唱するかについて思いや意図を持っている。	①「四重奏曲ニ短調TMV43:d1」のリズム、旋律、テクスチュア、強弱を聴き取り、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、楽曲の文化的・歴史的背景や作曲者及び演奏者による表現の特徴を理解して、楽曲や演奏を解釈したり、自分にとっての楽曲や演奏の価値を考えたりして、音楽に対する理解を深め、よさや美しさを創造的に味わって聴いている。	
音楽を形づくっている要素の知覚 それらが生み出す特質や雰囲気 《音楽的な感受》			
「A表現」エ、「B鑑賞」イの指導事項			
音楽への関心・意欲・態度			
①「木を植える」の曲想と歌詞の内容、楽曲の背景とかかわり、混声四部合唱の特徴に関心をもち、合唱したり鑑賞したりする学習に主体的に取り組もうとしている。 ②「四重奏曲ニ短調TMV43:d1」(『ターフェルムジーク第2巻』から)の歴史的・文化的背景や作曲者及び演奏者による表現の特徴に関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。			

中等教育資料(平成23年5月号)を参考に作成

観点である。主な学習の流れは、次のⅠ～Ⅲである。

Ⅰ 学習内容に関する関心
『木を植える』を表現教材として扱い、歌ったり聴いたりしながら、曲想と歌詞の内容や楽曲の背景とのかかわりなどに関心をもつ。また、曲想を生み出している「音楽を形づくっている要素」を意識する。

Ⅱ 音楽表現の追求
Ⅰの段階で意識した「音楽を形づくっている要素」の知覚・感受を深めながら、歌詞の内容やリズム、フレーズのまとまり、重なりなどを基に『木を植える』にふさわしい表現についてまとめる。クラスで意見交換し、歌って試しながら、音楽表現の創意工夫や技能に係る力を育み、主体的に歌唱表現をする。

Ⅲ 創造的な鑑賞と音楽表現のさらなる追求
『四重奏曲二短調 TMV43:d1』を鑑賞教材として扱い、ⅠやⅡの段階で知覚・感受を深めたことや歌唱表現を追求した体験などを生かしながら、楽曲や演奏を解釈し、音楽のよさや美しさを主体的、創造的に味わって聴く。鑑賞で理解したことを『木を植える』の歌唱表現に生かし、ふさわしい音楽表現をイメージして思いや意図をもって工夫を重ねながら、混声四部合唱の響きを追求する。

(2) 研究協力校における授業実践と考察

授業実践は、研究協力校である福井市内の県立高校1年生159名を対象に行った（表6）。まず、生徒たちの合唱体験を「中学校での

表6 題材全体の学習活動と評価の位置づけ

学習内容」の調査から見てみると、その多くが混声四部合唱に取り組んだ経験がないことが分かった。また、多数の生徒が、高校での学習への期待として、中学校での音楽経験を基に、「仲間と合唱したい」という強い思いをもっていた。そこで、授業実施前に『合唱をするとき、何に気を付けて歌っているか、何を大切に歌っているか』を調査した。選択肢は、その後の学習指導を見据え、意図的に「音楽を形づくっている要素」を中心とした。驚いたことに、音程や発音・リズム・ハーモニーなどが上位を占め、歌詞の内容があまり重視されていなかった（表7）。これは、今までの学習経験から、合唱が仲間と協力しながら創り上げていく音楽活動であることを学び、十分理解しているからだろう。ここに学校で音楽を学習する意味の一端がある。それらに加えて、歌詞の内容やフレーズのまとまりなどを理解し、自己の表現意図をもって合唱をしていくことが、幅広い音楽表現を実現していくためには重要である。そこで、感性を高めながら、創造的に混声四部合唱の響きを追求することを最終目的とした。

時	題材全体の学習指導 主な学習活動の展開	評価の位置づけ 評価の観点、評価規準、主な評価の対象、評価方法			
		音楽への 関心・意欲・態度 ①学習する内容への関心【観察・ワークシート】	音楽表現の 創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
1	「木を植える」の曲想と歌詞の内容、楽曲の背景とのかかわりなどに関心をもつ。	①学習する内容への関心【観察・ワークシート】			
2	「木を植える」を歌ったり、聴いたりして、リズム、旋律、テクスチャ、強弱を知覚し、それらの動きを感じる。		①リズム、旋律、テクスチャ、強弱の知覚・感受【観察・ワークシート・楽譜への書き込み】		
3・4	歌詞の内容やリズム、フレーズのまとまり、重なりなどを基に「木を植える」にふさわしい表現について、楽譜へ書き込みながらまとめる。		②知覚・感受に基づく創意工夫【観察・楽譜への書き込み】	①創意工夫を生かして歌う技能【観察・演奏聴取】	
5・6	グループ発表を行い、クラスとして「木を植える」にふさわしい表現について意見交換し、試行錯誤しながら、歌詞の内容やリズム、フレーズのまとまりなどの知覚・感受を深める。				
7	これまでの学習を踏まえて、「四重奏曲二短調TMV43:d1」を鑑賞し、楽曲や演奏を解釈し、よさや美しさを味わう。	②楽曲の背景や表現の特徴への関心【観察・ワークシート】			①知覚・感受に基づく創造的な鑑賞【ワークシート】
8	鑑賞で理解したことを「木を植える」の合唱表現に生かし、ふさわしい音楽表現をイメージして思いや意図をもって工夫を重ねながら、混声四部合唱を追求する。		②知覚・感受に基づく創意工夫【観察】	①創意工夫を生かして歌う技能【観察・演奏聴取】	

に「音楽を形づくっている要素」を中心とした。驚いたことに、音程や発音・リズム・ハーモニーなどが上位を占め、歌詞の内容があまり重視されていなかった（表7）。これは、今までの学習経験から、合唱が仲間と協力しながら創り上げていく音楽活動であることを学び、十分理解しているからだろう。ここに学校で音楽を学習する意味の一端がある。それらに加えて、歌詞の内容やフレーズのまとまりなどを理解し、自己の表現意図をもって合唱をしていくことが、幅広い音楽表現を実現していくためには重要である。そこで、感性を高めながら、創造的に混声四部合唱の響きを追求することを最終目的とした。

今回の授業では、中学生と比べ、身体的にも精神的にも成熟した高校生だからこそ求めることのできる、安定した音程や豊かな響きを期待した。また、中学校での混声三部合唱の学習内容を基礎に、生徒たちの知識欲を満足させるような活動を提示し、まだ自身が気付いていない音楽的な能力を引き出すことを目指した。そのために、「仲間と声を合わせて歌いたい」という思いを大切にしながら、それぞれが知覚・感受したことを基に自らが考え、試行錯誤しながら音で表現する過程（表6 第2～6時）や、曲の背景や作曲

者による表現の特徴などを理解し、聴き深めたことを演奏に生かそうとする過程（表6 第7時）を重視した。活動の様子について、第2時、第3～6時、第7時の三つに分けて述べる。

第2時では、歌詞を朗読したり、曲想や歌詞が表す思いなどを考えながら合唱、鑑賞したりする中で、知覚・感受を深めていった。生徒一人ひとりが、歌詞の内容やリズム、フレーズのまとまり、重なり、強弱などに着目し、感じ取ったことをまとめた内容が図3である。

それらを基に『木を植える』にふさわしい表現について、第3～6時で、音楽的な感受を基に音楽と向き合いながら、自分の考えだけでなく、仲間の考えを知り、互いに意見を分かち合った。生徒たちからは、「話し合うことで、自分とは違う考えを知ることができた」「気付かなかったことに気付けた」などの言葉が聞かれ、思いを共有しようとしていたことが分かる。そして、クラスとしてふさわしい音楽表現をイメージし、それを言葉で楽譜に記した。しかし、歌って試しながら音楽表現を追求していくにつれ、自分たちの演奏と、目指す合唱表現の間に、ズレが生じていることに気付いた。気持ちの高まりだけでは、イメージした音楽表現には近付けない。合唱の特徴を生かした音楽表現のために必要な発声や言葉の発音、姿勢や身体の使い方などを向上したいという思いが芽生えた。技能の向上に目覚めた生徒たちへの指導は、とても手応えがあった。今まで通り、技能習得のための指導は、根気強く継続的に行っていかなければならないが、音楽表現の創意工夫とその技能は、互いにかかわり合いながら伸ばされていくべきであると感じた。

知覚・感受を深め、合唱表現を追求した体験が、第7時での楽曲のよさや美しさ、表現の工夫などを聴き取る活動と、共通に扱う「音楽を形づくっている要素」の知覚・感受に基づく思考・判断の部分で、つながりを見せた。ワークシートの記述にも、「和声美しく、音の重なりがあると音楽に深みが増す。『木を植える』も、和音の移り変わりを意識すれば、旋律の歌い方や息を合わせるところも良くなると思う。『四重奏曲ニ短調 TMV43:d1』では、その点が優れていると感じた」「複数のリコーダーの音が、互いをサポートするようにハーモニーを奏でているので、男声と女声が互いを意識しサポートするように歌うといい」といった内容が見られ、二つの曲を比較しながら聴き、それぞれの価値を見出していることが分かる。また、録音した演奏を聴いたことで、課題がより明確になり、さらに合唱表現を高めていきたいという思いが高まっていった。

表7 授業前アンケート(n=159)

	1位	2位	3位
歌詞の内容	11	12	14
音程や発音	65	19	9
発声	15	13	8
ハーモニー	27	27	28
リズム	19	34	22
旋律の流れ	4	4	8
フレーズのまとまり	2	7	9
音楽用語や記号	0	3	8
曲全体のしくみや流れ	5	7	10
パート同士の絡み方	3	10	10
速度や強弱	6	20	26
その他	1	1	6
無回答	1	2	1

「音楽を形づくっている要素に着目し、感じ取ったこと」ワークシートより

曲を特徴付けているリズム

- ・8分音符の美しい流れと、ピアノ伴奏の4分音符の自然の壮大な流れ。
- ・前奏の4分音符の刻みと、ゆっくりと音が下行して行く様が、暖かい日差しが降り注ぐ感じ。

旋律のつながり方、旋律のさまざまな組み合わせ方や重なりなど

- ・伸ばすところの多さや休符があまりないことから、ずっと生きている感じを受けた。また、自然の流れやゆっくりと変化してきていることを感じる。
- ・「木を植える」追いかけて、2回歌うことによって、メロディーが心に残るようなしかけがある。重要なメッセージ。
- ・女声と男声の少しずつのズレによって立体的（奥行きがある）になっている。

強弱の設定や変化など

- ・p→mp→mf→cresc.→f→cresc.→Coda ffについて、小さいところは優しさ、大きいところは雄大さがある。また、だんだん大きくなるのは、広がっていく感じで、自然の雄大さや自然のもつ大きな力

図3

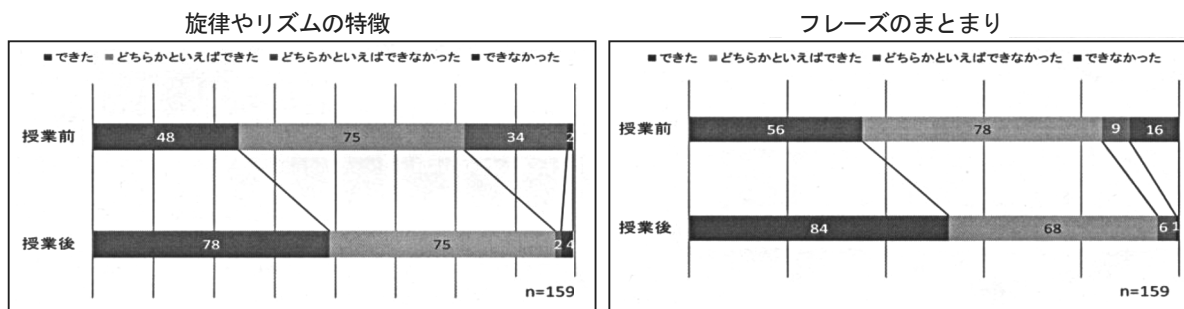


図4 授業前と授業後の生徒の変容

図4は、『音楽を形づくっている要素をどのくらい意識し、合唱に生かしているか』について調査した、授業開始前と終了後の変容を表したグラフの一部である。これらから、音楽的な感受を基に思考・判断する学習による様々な過程を経た結果、生徒たちの意識に変化が起こった様子が分かる。また、授業後の感想で「ただ歌うよりも、楽譜をみんなで読み解いたり、話し合ったりすることで、より曲に込める思いが強まり、いろいろな歌い方を工夫できた」「リコーダーの演奏から汲み取ったことを合唱に生かすという発想はなかった。ハーモニーを感じながら歌うために、とても役に立った」なども、表現意図のある合唱表現へと結び付いていったことが分かる。自分たちで合唱を創り上げるという作業の大変さはあっても、それぞれが手応えを感じながら、いきいきと音楽活動に取り組んでいた。生徒たちの知識欲が湧き起こる題材だったと言えよう。

V 研究のまとめ

本研究において、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、中学校音楽科を基礎に音楽Iで取り組むべき学習内容を整理し、新しい評価の観点を基にした「指導と評価の年間計画」を作成することができた。また、表現と鑑賞を関連付けた題材構成は、共通に扱う音楽を形づくっている要素の知覚・感受によって相互関連が図られ、音楽表現を創意工夫しながら追求したり、創造的に味わって聴いたりする学習の充実に有益であることを検証した。研究発表会では、「高校生の感受や気付きの素晴らしさに感心し、これらを引き出せる授業の工夫が不可欠であると感じた」「表現と鑑賞の相互関連を図った学習がどのようなものか知ることができた」などのご意見をいただいた。これらを参考に、今後も、さらに表現と鑑賞を有機的に関連付けた学習を追求し、実践と改善を繰り返しながら、「指導と評価の年間計画」の改良を図っていきたい。

なお、作成した「指導と評価の年間計画」については、福井県教育研究所音楽担当にて保管する。ご覧になりたい方は、筆者までご連絡ください。最後に、本研究のためにご協力・ご助力いただきました福井県立藤島高等学校芸術科音楽田中準一先生、福井県立福井商業高等学校芸術科音楽北島恵美子先生をはじめ、多くの先生方にお礼を申し上げます。

《引用文献》

- 文部科学省(2009)『高等学校学習指導要領解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編』教育出版
- 日本学校音楽教育実践学会編(2003)「学校音楽教育実践シリーズ5 思春期の発達の特性と音楽教育」音楽之友社(藤沢章彦執筆担当より p. 11~13)

《参考文献》

- 文部科学省(2009)『高等学校学習指導要領』
- 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社
- 文部科学省(2012)『言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】』(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/genko/1322283.htm)
- 文部科学省(2010)『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/information/1292358.htm)
- 文部科学省(2010)『学習指導と学習評価に対する意識調査報告書』委託調査(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/1289879.htm)
- 文部科学省(2008.5月号~2013.1月号)『中等教育資料』ぎょうせい、学事出版
- 国立教育政策研究所(2012)『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 芸術〔音楽〕】』教育出版
- 国立教育政策研究所「特定の課題に関する調査—中学校音楽—」(<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokuteikadai.html>)
- キース・スワニック(2004)「音楽の教え方—音楽的な音楽教育のために—」音楽之友社
- 日本学校音楽教育実践学会編(2006)「生成を原理とする21世紀音楽科カリキュラム—幼稚園から高等学校まで—」東京書籍
- 岡田卓也、谷川俊太郎(2007)「いのちの木を植える」マガジンハウス
- 平成25年度使用教科書「音楽I Tutti」,「高校音楽I Music View」教育出版
- 平成25年度使用教科書「MOUSA1」,「高校生の音楽1」教育芸術社
- 平成25年度使用教科書「高校生の音楽1」,「ON!1」音楽之友社
- 平成24年度使用教科書「中学生の音楽1, 2・3上下, 中学生の器楽」教育芸術社